



ジュニア大使友情使節団

～米国シアトル班の活動記録～

今夏の「ジュニア大使友情使節団」は、創始以来、28年目、シアトルへは22年目・479人の派遣となっている。多感な子どもたちが、外国語や異なる文化への関心を広げ、「真の国際交流」を理解し、世界的視野に立った人に育つよう願って、内外の公的機関の後援を得て1985年に始まった事業。これまでの派遣総数は3,718名。

今夏のシアトル班の団員日誌と感想文より活動を紹介しします。

◇

結団式、事前研修

＜出発前日に1泊2日の事前研修＞

今日は初めて会う友だちとバスの中で絵しりとりをしました。だんだんと団員同士仲良くなり楽しかったです。

大学特設の英語研修

＜7日間の英語研修＞

シアトルの大学で、大きなピザを食べました。“I have never seen such a

big pizza!”と言ったら、ジェイソンたちが笑っていたので、「通じた」と思いました。とても嬉しかったです。

ホストファミリー

＜7泊8日のホームステイ＞

英語研修のあとにホストファミリーとの対面式がありました。文化紹介では、緊張と練習不足で箸レースはうまくいきませんでした。けん玉はすごくよかったです。皆で歌った英語の歌もそろっていました。ホストファミリーはとてもやさしくていい人です。

ホストのお母さんとお父さん、おばあちゃんと教会に行きました。すごく大きくてびっくりしました。午後はブルーエンジェルスを見に行きました。

訪問・交流

＜公的機関表敬や交流＞

日系老人ホームに行き、日本文化紹介をしました。みんな喜んでくれました。アイスを食べながらお話をしたり遊んだり楽しいひとときでした。

総領事館訪問では太田総領事とお話しができました。とても緊張しました。どんな仕事をしているかをお聞きしました。イチローがシアトルにいるときに日本から来た人が約8万人と聞き、イチローはすごいと思いました。

＜キャンプ場での交流＞

皆で作ったホットドックを食べたあと、ゲームなどをしました。みんな積極的で驚きました。



州議会庁舎でワシントン州総務長官と会談

研修を終えて

みやざき しん
宮崎 晋

東京都・私立世田谷学園高校2年
この研修旅行で一番、ワシントン州政府表敬訪問が印象に残っています。州議事堂という政治的な建物でその場所のトップの方と直接会って話をするという、大人になったとしてもなかなか体験できないこと、そして雰囲気も味わうことができたからです。

最初は、「そんな人に会ったとしても英語の学習以上のものにはならないだろう」と思っていました。しかし実際に会ってみると気品や自信といった、トップに立つ人独特のものを感しました。このとき、自分の以前の考えを恥じるとともにこの人の話を聞くことができるということを誇りに感じました。

このような素敵な体験をさせていただいた人たちと様々な経験をともにした5人のジュニア大使に感謝します。この経験を生かして世界に何らかの形で貢献できるような人間になるべく尽力していきたいと思います。

世界万華鏡

韓国

さいじゆんしゆく
崔 順 淑

江角ヤス校長先生の思い出（その2）

江角校長先生は当時日本全国で女性教育の最高と言われた高等師範の一つであるお茶の水高等師範を出られた。それだけに自信があり、早くから日本一の女流数学者を目指した。東北帝国大学の理学部に入られ紅一点の人気学生だった。ある時、江角先生は、友人に誘われフランスの神父様を訪問し、「マリヤ様の御一生」という本を読む機会を得た。そのときキリストのお母様でさえこんなに謙遜で質素な生活をなさったのに私がこのような生活をしてはいけないと、自分を知ってへりくだることを悟り、学生のように洗礼を受けられた。その後、早坂久乃助司教様の勧めでヨーロッパで4ヵ年、教育に関して学ばれ、修道者になられて帰られ、純心学園を創立された。きわめて聡明で銀のようなまぶしい輝きがあり、全校生600余名の氏名も大概に覚えらるるくらいの記憶力だった。こんなエピソードもある。

ある日、私の隣席のTさんがたまたま遅刻をする場合があり、その日もあいにく江角校長先生に見つけられてしまった。「あなたこの前何日にも遅刻したでしょう」と言われた。遅刻した本人曰く、「あんなに遅刻したこと

を覚えて注意を繰り返されると直るはずがない。いっちょすかん」と長崎訛で話す。江角校長先生は二つ褒めて一つ注意をなさる極めて寛容ではあったが原則には厳格であった。

また、こんなこともあった。江角校長先生はたまたま数学の補欠授業に来られた。その日は三次方程式に入る時間だったが、生徒たちが早く理解ができないので校長先生自ら黒板にすらすら解かれるのを生徒たちはノートに写した。それをご覧になり、「まあ、あなた達はお嫁に行ってお飯だけ良く炊けばそれでいいのよ」とさっと消してしまわれる。生徒たちは惜しく「あらまあ」と叫びながらも校長先生の能力には感嘆せざるを得なかった。

また、戦時中は、何もかも不足な時期だったが、特に食糧不足なのを江角校長先生は成長盛りの娘たちに栄養不足がないようにと苦心されていた。それであらゆるところに依頼し食料だけはいつも確保しご飯だけでもお腹いっぱい食べられるようにして下さった。今もあの白米と押麦の半々のご飯のおいしかったことは忘れられない。いつも余るように準備しておくために、日曜日にはきまって買い出しに行ってい

た。寮に帰るとうれしいことに、竹籠にご飯が残っていて、お茶漬けに沢庵一つでもおいしく腹いっぱい食べられる。そんなときにも江角校長先生に感謝の気持ちでいっぱいになった。時には、ぼた餅を作って下さった。限りなく寮生の面倒を見てくださる慈愛深いお母様だったと思いあらためて感謝の念が起る。

江角先生にはユーモアもある。ある日、寮食のメニューがカレーライスのときがあった。一同が食べ始めると江角校長先生が入って来られ、「今、皆さんが食べているカレーの肉は、皆さんが可愛がって飼っていた兔なのよ」とおっしゃったので、一同がわあっと叫びながら、流しにある鉢に捨ててしまった。そのときの校長先生のご様子はどうであったかしみじみ考えながら生前を偲びご冥福を祈る。

(つづく)

平成24年8月17日発行
一般社団法人 国際フレンドシップ協会
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-12
麻布台ロイヤルプラザ502
発行責任者：及川 伊佐子
編集：事務局 03(3582)3021
印刷：音和堂印刷株式会社